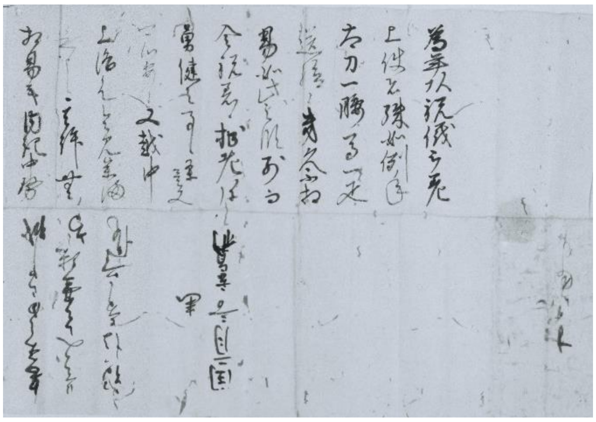
八代市立博物館　解説シート

武家と馬―出陣から贈答まで―

　馬は武士にとって最も身近かで、意味をもった存在です。日々の移動や情報、貨物の運搬手段はもちろん、戦場においては生死をともにしてきました。名馬をもつことは武士にとって権力の証であり誇りでもあります。その俊敏で勇壮な馬は多くの人を魅了し、武家間の贈答品としても重宝され、時には自ら筆をとり馬を描く武士もありました。今回は八代城主松井家に伝わる江戸時代の馬と武家に関する古文書や絵図 6 点から、馬がいかに愛され、当時の武家社会にとって欠かせない存在であったかを紹介します。

①細川幽斎書状　松井康之宛　江戸時代前期　慶長 15 年（1610）閏 2 月 3 日　松井文庫所蔵

年始のお祝いに馬一匹



　細川幽斎（藤孝）が、松井康之に送った書状で、年始のお祝いに康之から馬をもらったことへの御礼が述べられています。馬を贈る慣習はすでに平安時代から見られ、江戸時代の武士には年始や八朔の祝い、三季（端午、重陽、歳暮）などのさまざまな贈答が慣習化し、その主たる贈答品が刀と馬でした。馬を贈ることで、主家と家臣、武家同士の良好な関係が保たれました。

②馬図　伝細川三斎（忠興）筆　江戸時代前期　17 世紀　松井文庫所蔵

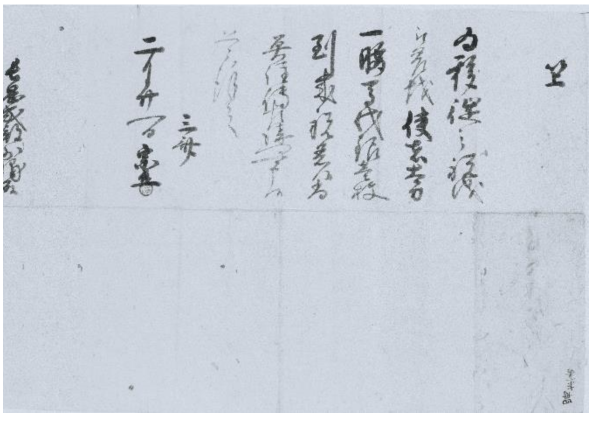
細川三斎が描いた馬の図

　細川三斎（忠興）が描いたと伝わる馬の図。馬は絵師だけでなく、武士にも好んで描かれた画題です。三斎もよく馬を描き、三斎筆と伝わる馬の図が複数残されています。

　この図は、２匹の馬を耳、胴体、足を濃墨で、たてがみと尾を淡墨で描いています。戯れるような２匹の姿はほほえましく、多くの戦場を馬と共に駆け抜けた三斎の馬への愛着がうかがえます。

③細川三斎書状　松井興長宛　江戸時代前期　元和 8 年（1622）2 月 21 日　松井文庫所蔵

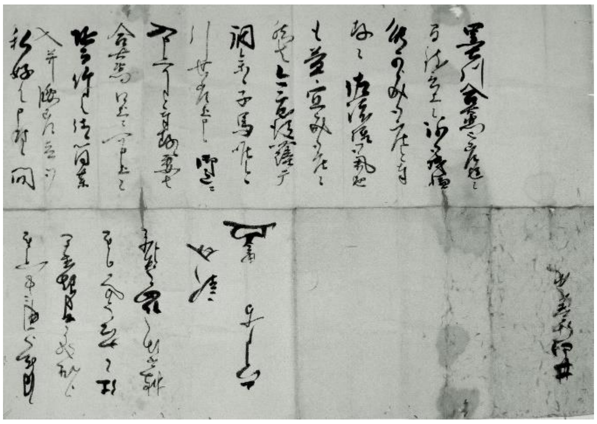
引っ越し祝いに馬代



　細川三斎（忠興）から松井興長に送った書状。引っ越しのお祝いに太刀一腰と馬代銀一枚をもらったことへの御礼を述べています。忠興は、元和６年（１６２０）に隠居して細川三斎宗立と名乗り、同７年に豊前小倉（福岡県北九州市）から中津（大分県中津市）へ引っ越しました。馬代とは、馬そのもののかわりに贈るお金のことです。贈答がお金で行われるようになっても、馬を贈る慣習は「馬代」として残っていきました。

④松井直之自筆書状　井山弥三右衛門宛　江戸時代前期　17 世紀　6 月 10 日　松井文庫所蔵

薩摩のブランド馬　薩摩馬

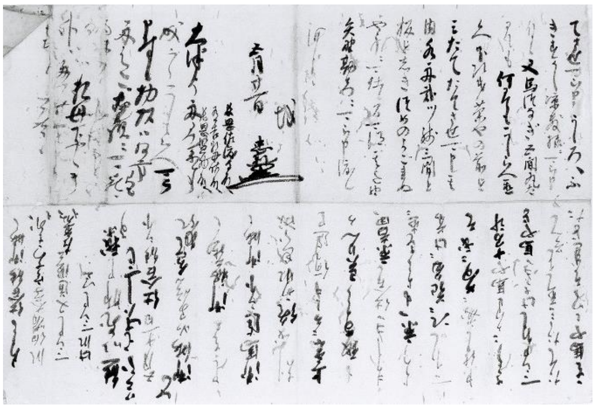


松井氏之（直之）が、松井寄之の家臣である井山弥三右衛門に送った書状で、薩摩国から調達した子馬を父である寄之に贈ったことを伝えています。薩摩国は、現在の鹿児島県にあたり、戦国時代（１６世紀）には九州一の牧場を持つ馬の一大産地でした。直之は、名産地から取り寄せた子馬に期待を寄せて「お気に召してください」と伝えています。

⑤細川忠利書状

松井興長・有吉英貴、米田是季宛　江戸時代前期　寛永 17 年（1640）5 月 2 日　松井文庫所蔵

将軍から秘蔵の馬を拝領

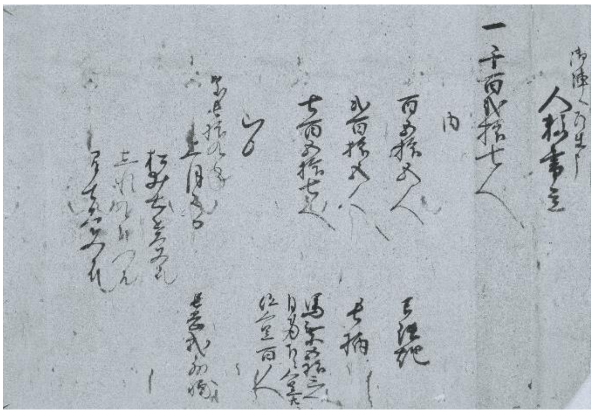


熊本藩主の細川忠利が参勤交代を終え、熊本への帰国途中に松井興長たち３人の家老へ送った書状。忠利が江戸を出発する際、将軍の徳川家光から秘蔵の馬をもらったことが記されています。忠利は興長たちに対し、熊本の花畠屋敷（藩主の屋敷）に、この馬のために新たな馬屋を建てるよう伝えています。この馬屋には涼しいように吹き透かしにし、馬の爪が汚れないように板を敷くなど、細かく指示が出されています。

⑥松井興長御陣へ召出申人数書立案

入江右近・志水九左衛門・間七大夫宛　江戸時代前期　慶長 19 年（1614）11 月 5 日　松井文庫所蔵

武士といえば馬乗



大坂冬の陣に参戦する予定の松井興長の家臣の人数を書き立てたもので、細川忠興（豊前小倉藩主）の家臣３人に宛てたもの。**「馬乗」は、騎馬の武士**を意味し、戦場では軍隊の中心となります。この古文書によると、松井家の馬乗の数は５３人で、それぞれの馬乗が召し抱える扶持人を合わせると７５７人になります。